

「夫に従い、妻を愛するというキリスト」

エペソ人への手紙 5 : 2 1 - 3 3

June.1.2025

エペソ人への手紙 5 : 2 1 - 3 3 (パウロ)

Preface

2000年前、イエス・キリストは何のために十字架に架かれたのでしょうか？

今読みましたエペソ書の御言葉によりますと、イエス・キリストは、妻が夫に従えるようになるために、十字架に架かって下さいました。

また、夫が妻を自分のからだのように愛せるようになるために、十字架に架かって下さいました。

それほどに、妻と夫・夫と妻の「あなたは私、私はあなた」という一人称の関係は、天地をも揺るがす問題であり、神にとって最も深刻で最も解決しなければならない霊的問題であり、天地万物の再創造という神が成そうとしておられる究極的な目的の最も大事な基礎であるということです。

先週見てきましたように、男と女、夫と妻とは、神様が定めて下さった祝福の現場、祝福の営み、社会性を持つ者として造られた人間が生きていく上で、最も重要で最も大切な共同体としての最小単位です。

この共同体としての最小単位が崩れることは、その社会がどんなにそれらしく装っていたとしても、本当のところはいびつで、ガタガタしていて、事実上崩れているということになるでしょう。

だからこそ、「三位一体なる神様は、イエス・キリストという人の姿をお取りになって、その最も大切な基礎土台となる関係を修復なさるために来られたんだ」と、生涯独身だった使徒パウロ先生が、自分の経験や知識に依らず、ただ神の御思い、神の言葉、神の視点に立って、今この聖書箇所、重要な神の奥義を教えて下さっています。

Part One

当初、神のかたち・似姿に造られた最初の男と女、アダムとエバは、「あなたこそ、私の骨からの骨、私の肉からの肉」と告白し合いながら、「あなたは私自身であり、あなたは、私という人の最も大切な私です」と、二人だけれども一人という一人称の関係を喜び、その幸いを味わっていました。

ところが、神との約束を破り、神の言葉を守らないという人として最も根本的な罪を犯した最初の人アダムとエバは、罪を犯し罪人となった瞬間から、「私とそれ」という三人称の関係、人を物扱いする関係へと没落していききました。

創世記 3 : 1 1 - 1 2 (パウロ)

「これこそ、この人こそ、ついに私の骨からの骨、私の肉からの肉」と喜びたたえ愛していたはずの妻エバに向かって、神との約束を破り罪人になった夫アダムの発した言葉は、「この女が！」「この女が！」です。

神との関係が壊れたことによる症状が、どのような形で表れたのかと言いますと、一番近い人、「あなたは私だ」と、「私という人の最も大切な私だ」と実感していた人に対する憎しみです。

そして、そんな二人に対して神様は、彼らの行く末について語り、諭して下さいました。

創世記 3：16－19（パワポ）

「二人の愛の結晶であり、喜び以外の何ものでもないはずの二人から生まれて来るだろう我が子でさえも、あなた方に苦しみを被らせる存在となり、夫と妻との関係は支配し合う、マウントを取り合う、見下し合う、威圧し合うような関係に陥ってしまい、しかも、あなた方二人の関係は二人だけに留まっているようなものではなく、大地、つまり、自然世界・天然世界にも、『のろわれた』としか表現しようのない破壊という影響を与え、その破壊が人類の首を絞めるようになってしまう自業自得の連鎖のような世界を生きているようで、実のところ、土のちりに帰るしかない死へと、永遠の滅びへと向かう歩みをしてしまうことになる」と、神様は、罪人となってしまったアダムとエバに、彼らが直面するだろう厳しい現実についてその行く末をお語りになりました。

女性解放運動や男女の性差別問題などが、この社会において叫ばれるようになって久しいと思いますが、創世記 3：16 の「あなたは夫を恋い慕うが、彼はあなたを支配することになる」という、人類が神より語られた世界が実際にこの世界になり、神抜きでその問題を何とかしてみようとする人間の、本質的解決無きあがきのような活動とも言えなくもないように思います。

また、環境破壊が叫ばれるようになったのが、世界史においては 18 世紀の産業革命以降だとは言われてはいますが、実際は、人類の歴史を遡る聖書によりますと、「人が罪を犯したその瞬間からだ」と書かれています。

未だにその破壊を止めることも辞めることも出来ずに、この社会を回し続けているという実状は、創世記 3：17 の「大地はあなたのゆえにのろわれる」という言葉の実現でしかないように思えます。

男と女の関係、夫と妻の関係が、天地を揺るがす、その根本を基礎を土台を揺るがす大問題、本質的な問題であることを、聖書は、私たち人類に、遠い昔の昔から真っ直ぐに語り続けて下さっています。

Part Two

そして、この創世記 3 章には、問題を指摘し行く末を案じるだけでなく、その大問題の中に、神様自ら飛び込むかのような神の解決方法が、人類にとって

最も大切な教え、神の言葉が記されています。

原福音と言われる聖書箇所です。

創世記 3：15 (パワポ)

(2回読む)

ここにある「わたし」とは父なる神様のこと、「おまえ」とは、アダムとエバを誘惑し、罪へと落とし入れた蛇に化けたサタン悪魔のこと。

「お前の子孫」とは、サタンに従う墮天使・悪霊たちと、そんなサタンの支配下にあって生き滅びようとしている人々。

そして、「女の子孫」と「彼」とは、人類のために人の子としてお生まれになったメシア、イエス・キリストのことを指している言葉だと言われています。

つまり、神のかたち・似姿に、被造物の中で唯一特別に創造された神の愛するアダムとエバ、また彼らに連なる人々・人類をお救いになるために、サタンの頭を打って救い出すために、女エバの子孫として人の姿をとったイエス・キリストなる救い主を人々の真っ只中に送るという、神が宣言なさった最初の福音の言葉が、この創世記 3：15 の原福音と言われる御言葉です。

さらに 21 節には、イエス・キリストの十字架の犠牲を予型している御言葉も記されています。

創世記 3：21 (パワポ)

罪を犯したために、神様がお造り下さった楽園、神の国エデンの園を追放されることとなり、罪人として、罪人の世界で、これから生活していかなければならなくなってしまったアダムとエバのために、神自ら皮の衣をお造りになって、彼らに着せて下さいました。

エデンの園では、その体に赤い血が流れている動物が殺されたり、食されたりする弱肉強食・食物連鎖のようなものは存在していませんでしたし、人や動物が食することを許されていた食べ物も、(創世記 1 章の記述によりますと)「緑の草」、つまり植物だけでした。

神様が初めにお造りになられた天然世界の秩序には、優勝劣敗・自然淘汰のような肉体的物理的に力が勝る者がてっぺんに行くような、ピラミッド構造のような秩序体系ではなく、そのようなものはお造りになりませんでした。

ところが、自らお造りになられたそのような天然世界の平和の秩序構造をあたかも神自ら壊すかのように、動物を屠殺し、動物の血を流し、皮を引っぺがしながら、力を尽くしてお造りになられたその創造秩序を壊してまで、「寒かろう、辛かろう」と、罪人となってエデンの園を出て行かなければならなくなってしまったアダムとエバをいつくしまれながら、神様は皮の衣を着せて上げ

るのです。

弱肉強食・適者生存・勝ち残りのような互いが互いを責め立て、争う競争世界を否応なしに形成せずにはいられない、いつでも噴火する用意が出来ているマグマのような内なる罪とともに生き死んで行かなければならなくなってしまったアダムとエバに、彼らへの神の愛の真剣さを表す、救いを表す皮の衣を着せて上げました。

この皮の衣を着せるという神様の行為は、主にレビ記などに記されています、人の罪の赦しのために献げられるいけにえ制度の原形であり、やがて、新約聖書に繋がるイエス・キリストの十字架の贖いを予型しているものでもあります。

ピリピ書2章に、「キリストは神の御姿であられるのに、神としてのあり方を捨てられないとは考えず、ご自分の姿を空しくして、しもべの姿となり、人間と同じようになられ、十字架の死にまで従われました」とある通りです。

正に、天地万物がひっくり返ってもあり得ないよう創造主であられる神ご自身が死なれるということを、三位一体なる神様は、人をお救いになるためになさいました。

そして、その救いの御業が、誰に最初に宣言され、成されたのかと言いますと、最初の男と女、最初の夫と妻、アダムとエバにです。

ゆえにアダムとエバは、人類史上最初の神の救いに与った方たちで、今、天国におられることでしょう。

神自らお語りになった原福音を聞き、キリストの十字架の贖いを表す皮の衣を着せられたのですから。

そうして、このような創世記の救いの記述を念頭に置きながら語られている言葉。

聖霊に導かれた使徒パウロ先生の心と頭の中に、この創世記の記述が巡りながら書き上げられた福音の言葉が、エペソ書5章の「夫と妻という関係の中に表れるキリスト」なんだと思います。

エペソ人への手紙5：22－33（パウロ）

Part Three

神様が、私たちを祝福して下さったもののうち最も大きな祝福のうちのひとつが、夫と妻、妻と夫が愛し合うことから始まる家庭の営みなんだと思います。

御言葉にある通りですね。

もちろん、どの家庭にも、どの夫婦にも、年がら年中365日24時間いつでも平穏で、不和も無く、争いも無く、危機も無く、「うちの家庭のこと、夫婦のこと、全部人に話せますし、見せられますよ」なんていう夫婦・ご家庭は存在しないと思います。

恥ずかしながら、我が家だってそうです。

でも、不和もあり、争いもあり、危機もあり、人に話せない、見せられないようなことがあっても、それでも、幸いなことに、キリストにあって、キリストゆえに、キリストを恐れて、キリストに従うならば、どの夫婦もどんな家庭も、「ふたりは一体となる。この奥義は偉大です」という祝福の言葉、約束の中にあれる道が開かれています。

夫と妻の中にあらわれるキリストを知れるのです。

私にとっても妻との関係は、人生における核であり、私の人生を左右する要です。

牧師として働く教会には、正直大変なことが少なくありませんし、その働き自体がぐらぐらと揺らぎ、辛く苦しいところを通ることがありますが、妻との関係が良く、堅固で頼もしく安心出来るものであれば、倒れてしまった倒れてしまうような局面でも、乗り越える力が与えられてきました。

逆に、どんなに教会の働きが上手に行っていると思えたとしても、家庭が、妻との関係がぐらつきますと、教会の働きは余地なく揺るぎました。

どれだけ妻との関係が大事なのかということを、そういう経験を通して、神様から身をもって教えられているように思います。

神様は今、使徒パウロ先生がお書きになったエペソ書を通して、私たちに、夫と妻について大切に、とても具体的な御言葉を下さっています。

「妻たちよ、自分の夫に従いなさい」、「夫たちよ、自分の妻を自分のからだのように愛しなさい」。

夫に従っているでしょうか？

妻を愛しているでしょうか？

夫に従うことと、妻を愛すること、どちらの方がより困難で難しいでしょうか？

聖書は、男と女に優劣を付けたり、区別や差別を付けたりはしていません。

肉体的構造から来る役割の違いと言いましょいか、それぞれに持っている得意な点、優れている点のようなものは肯定的に認めているように思いますし、同時に男女の性別を超えた人それぞれの個性も認めているように思います。

例えばヤコブは、当時男たちの仕事だと思われていた猟をするよりも、女性たちの仕事だと思われていた家で料理をすることの方が好きだったようです。

イスラエルを導くリーダーである士師でもあり女預言者でもあったデボラという方は、女性でありながら、男性戦士たちを導いて戦いに出て行き、イスラエルに大勝利をもたらしました。

神様は、男と女をそれぞれに、身体的精神的特徴ある者としてお造りになりながら、また同時に、それぞれの個性に従って、人が作った男のイメージや女のイメージを超えた個性も認めて下さっておられるように思います。

つまり、人は同等です。

ガラテヤ人への手紙 3 : 28 (パウロ)

「あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって一つだからです。」

これこそ、聖書が教える人の姿、キリストにある公平な同等の人の姿、男女の姿だと思います。

つまり、妻に対して「夫に従いなさい」と言っている御言葉と、夫に対して「妻を愛しなさい」という御言葉は、同じ意味だということです。

何となく、「従いなさい」という言葉の方が、「愛しなさい」という言葉よりも、強制的で、拘束力があり、上から目線の、感情を押し殺してでもやらなければならないようなイメージを持ちやすいかもしれませんが、ここでの、「従う」と「愛す」とは同義語だと思います。

愛しているならば、仕えたいと思うでしょうし、従いたいと思う。

従っているならば、愛しているからだだと思いますし、愛したいと思っているからだだと思います。

ある詩人が、こう詠っているのを聞いたことがあります。

「人は自由が好きだと言うが、私は従うことが好きである。」

深い詩だなあと 생각합니다。

相手の力を恐れ、致し方なく言いなりになる「従う」ではなく、愛しているから、愛したいから、愛したいと思うから、従う。

「従う」という行為に、自由以上の自由、喜びを覚えるということなんだと思います。

「従う」ということは、厳密に言えば「愛」であり、「愛する」ということも、厳密に言えば、「従う」ということになるでしょう。

このエペソ書で言う、「夫に従いなさい、妻を愛しなさい」という言葉は、『あなたこそ、私の骨からの骨、私の肉からの肉。あなたこそ、私という人の最も大切な私です』という喜び、生きがい、やりがい、祝福を覚えながら、ぜひ生きて欲しい」という神様から私たちへの願いのような言葉だとも思えてきます。

しかも、それを語っているのが、独身であった使徒パウロ先生だったというのが、意義深いと言いましょか、奥深い神様のお取り計らないなんだなあと 생각합니다。

Part Four

聖書という書物は、全ての人にあまねく語られている言葉ですが、その一つ一つの書物、また、言葉を見ますと、受け取り手、読み手がいることが分かります。

モーセ五書ならばイスラエルの民たちに向けて、エペソ書ならばエペソに住んでいるクリスチャンたちに向けてという風にですね。

では、「妻たちよ。主に従うように、自分の夫に従いなさい」という言葉は、夫たちに下さった言葉でしょうか、妻たちに下さった言葉でしょうか。

妻たちに下さった言葉です。

「夫たちよ。自分のからだのように妻たちを愛しなさい」という言葉は、妻たちに下さった言葉でしょうか、夫たちに下さった言葉でしょうか。

夫たちに下さった言葉ですよね。

でも面白いことに、「妻たちよ、夫に従いなさい」という言葉を好み、好きなのは、妻たちでしょうか、夫たちでしょうか？

夫たちですね。

夫たちに下さった言葉ではないのに、夫たちが、妻たちにこの言葉をもって突っかって行きます。

「聖書がこう言っているでしょ！ あなたはクリスチャンなんだし、信仰歴だって長いんだから、私に従いなさい」という感じでしょうか。

でもこれは、送り先が違う、住所違いのとんだ見当違いですよ。

「妻たちよ、夫に従いなさい」という言葉は、夫たちに下さった言葉ではありません。

夫の権利を振りかざすために、妻を問いただすために下さった御言葉ではなく、夫とは何の関係もない、妻たちに下さった御言葉です。

また、夫たちに下さった御言葉、「夫たちよ、妻を愛しなさい」という御言葉は、夫たちが好む代わりに、妻たちが好むように思います。

夫に向かって、『妻を愛しなさい』と言われているのに、なんで私にこんなことするの？」と振りかざすならば、聖書はとりあえず読んだけれども、読み違いをしたことになってしまうでしょう。

聖書は、自分に語られていることを真剣に受け止めるところから始まりますよね。

「妻たちよ」と語られれば妻たちが、「夫たちよ」と語られれば夫たちが、その真意を受け止め、真摯に行うことを祈りつつ、取り組むだけです。

Part Five

では皆さん、ここでもう一つ質問です。

「妻たちよ、夫に従いなさい」という御言葉の責任は、妻たちにあるでしょうか、それとも夫たちにあるでしょうか？

私は、夫たちにあると思います。

先程も言いましたように、本当に愛しているならば、従うことはそんなに難しいことでもなければ、プライドが傷つくような事でもありませんし、嫌々屈するように従うのでもないはずですよ。

自分の意志から自然と出てくるはずです。

ではなぜ、妻は夫に従うのが嫌なのでしょう？

夫が従いたいと思わせるような生き方をしていないから。

夫が、妻が自分に従いたいと思うほどに、誠実に、正直に、出来不出来に関わらず真摯に生き、妻を愛しながら生きるならば、妻たちが、夫たちに従うことは、そんなに難しいことではないと言いましょうか、自然とそうなるのではないかなと思います。

同様に、「夫たちよ、妻を愛しなさい」という御言葉の責任は、夫にあるのではなく、実のところ、妻にあるものだと思います。

妻に対する御言葉の責任は夫が担い、夫に対する御言葉の責任は妻が担う時、「従い」、「愛する」ということが、何のためらいもなく、水が上から下に自然と流れるように成るでしょうし、それが成される夫婦・家庭ならば、それこそ、この地に成される体現される神の国であり、天国、天の御国なのでしょう。

そして、そんな責任の担い方が、「キリストを恐れて」、「キリストに従うように」、「キリストが愛したように」という言葉が、カギとなるんだと思います。

主イエス様は、私たちが不敬虔で、神を知らず、霊的盲目であった時、死んで下さいました。

相手が自分を愛し、従っているのかどうかに関わらず、責任を問うことも無く、自らその責任まで担われ、愛して下さいました。

人を攻める前に、自分の責任を問うなんていうことは、普通、つまり罪人であることが普通の私たちには、出来ないことですよね。

だからこそ、キリストを恐れて、キリストに従うように、キリストが愛したように、キリストのからだの部分であることを覚えられるように、聖霊なる神様の助けと導きを求めなければなりませんし、求めたいのです。

Conclusion

神様は、私たちの夫婦関係に、「この人こそ、私の骨からの骨、私の肉からの肉」という罪を犯す前のアダムとエバの雰囲気、その姿を再び生きる道を開いて下さいました。

イエス・キリストという、天の下で、私たち人間が救われるべき道はこの方以外には与えられていないという、このお方によってその道が開かれています。

夫を愛するがために、妻は夫を自分のかしらとして従いたいと思い、妻を愛するがために、自分のからだを愛すように愛したいと思う、そんな美しい関係を神様は私たちに望んでいて下さいます。

もちろんだからと言って、喧嘩しちゃいけないとか、言い争っちゃいけないということではなく、大いにぶつかり合いながらも、妻への御言葉の責任は夫が担い、夫への御言葉の責任は妻が担う気持ちを忘れず、聖霊様の助けによって思い出させて頂きながら、その祝福を味わわせて頂きたいと願います。

この御言葉のゆえに、皆さんの私たちの家庭が、さらに新しくされ、さらに
美しされ、さらに天国の前味を味わわせて頂く祝福の場となることを、主イエ
ス様の名によってお祈り申し上げます。

お祈りいたしましょう。

祝祷：エペソ 5：33